

県内高校生被災地へ

県教委など呼び掛け 計80人、奉仕活動

東日本大震災で、県内の高校生有志が8月に宮城県の被災地を訪れ、ボランティア活動に参加することが20日、決まった。県教育委員会と県高等学校生徒会連絡会が、私立を含む県内全ての高校に呼び掛けた。20日現在、28校から55人の申し込みがある。県教委は「奈良県の高校生を代表して頑張っ

てほしい」と期待している。望者がいる高校もあり、締め切り後に調整して受け入れる。県教委は「最終的に80人いっぱいになるだろう」とみている。県高等学校生徒会連絡会は、学校間の情報交換やボランティア活動を進めようと、生徒会長を中心に今年4月に発足。東日本大震災の発生直後から被災地入りを求める声があったという。これまで文具を送るなどの活動に

東日本大震災

募集は各校1、2人で、公立、国立、私立の計53校に文書で連絡した。

県の「学生等による災害ボランティアパス」を利用、40人ずつ2団に分けて宮城県気仙沼市に入る。第1団は8月17日夕方、奈良市をバスで出発し、18、19の両日、ボランティア活動に参

加、20日早朝に奈良市に戻る。第2団は21日夕方出発。現地では、家に流れ込んだ泥の除去やがれきの撤去、家具の水洗いやなどに従事するとい

う。ビジネスホテルの宿泊費と食事代は参加者の負担だが、県教委は所属校の支援も求めている。

さらに多くの参加希

取り組んできた。

県教委生徒指導支援室の沼田守弘室長は「現地での活動を通じて社会の一員であることを自覚し、支え合うことの大切さを学んでほしい」と話している。

漁業網整理お手伝い

県内高校生ボランティア 女子が気仙沼で

東日本大震災

東日本大震災の被災地を訪れている県内の高校生ボランティア隊は19日、宮城県気仙沼市で漁業網に絡まった異物を取り除く作業などに参加した。同日午後、気仙沼市の漁業網の整理は気仙沼湾近くで行われてお



漁業網の整理に従事する女子生徒＝19日、宮城県気仙沼市

東日本大震災の復興支援で岩手県陸前高田市と宮城県気仙沼市を訪れている県内の高校生ボランティア隊は18日、津波で破壊された家屋の片付けや地元高校生との交流会に参加した。(増山和樹)

県内高校生ボランティア



津波の被害を受けた家屋跡を片付ける高校生18日、岩手県陸前高田市

津波の爪痕一つずつ

男子は陸前高田 女子は気仙沼へ 撤去や交流会

県内31校から集まった約80人のうち、先発隊(第1団)の39人で、18日早朝、県からのバスで被災地に到着した。男子は陸前高田市で被災家屋の片付けに従事、女子は気仙沼市で交流会に参加した。津波の傷痕が残る海岸近くを抜けて指定の場所に到着した男子らは、午前9時半に作業を開始。降り続く雨中、基礎だけが残る家屋跡で草を刈り、流れ込んだ土砂をスコップでかき出した。

被災者思うと疲れは感じない

散乱する廃材やトタン板も一つ一つ拾い集めて道路脇に集積。県立大宇陀高校3年の辻本直也さん(18)は、同

じ日本に住む者として何か一つでも役に立ちたかった。被災者のことを思うとしんどいとは感じない」と話し、交流会には女子16人と宮城県立気仙沼向洋高校の生徒8人が参加した。

ボランティア終え帰県

県が派遣の高校生第2団

東日本大震災の復興支援で岩手県陸前高田市を訪れていた県内の高校生ボランティア隊第2団(40人)が24日、全員無事に帰県した。第2団は21日に県庁前をバスで出発、陸前

高田市で被災家屋の泥出しなどに従事した。第1団は20日に帰県している。高校生ボランティア隊は県教育委員会と県高等学校生徒会連絡会が県内の各校に呼び掛けた。始業式や文化祭で参加生徒の報告会を予定している学校もある。



津波で流れ込んだ土砂をかき出す生徒=23日、岩手県陸前高田市 (県教委提供)

加。槻橋修・神戸大学准教授が進めている被災前の町並みを模型でよみがえらせる作業を手伝った。



被災地での活動を報告する中沢さん(右端)と森村さん(中央) = 1日、奈良市法華寺町の一条高校

ともに歩む気持ちを

一条高校で被災地ボランティア報告会

奈良市法華寺町の市立一条高校(秦俊彦校長)で1日、東日本大震災の復興支援で高校生ボランティア隊に参加した中沢穂恵さん(2年)と森村美沙さん(同)が全校生徒に成果を報告した。

中沢、森村さん 全校生徒に訴え

始業式に続いて報告会があり、2人は県教育委員会が撮影した写真をもとに説明。中沢さんは宮城県気仙沼市で交流した中に「親を亡くした子どもたちもいた」と話し「被災された人々の思いを顔をそむけず受け止めることが、今の私にできる一番大切なこと」と「ともに歩む気持ちをもち続けることが何よりの支援」と呼び掛けた。森村さんは「復興への道のりはまだまだ遠いが、被災地の人々は確実に前を向いて

被災地支援、まだまだ必要

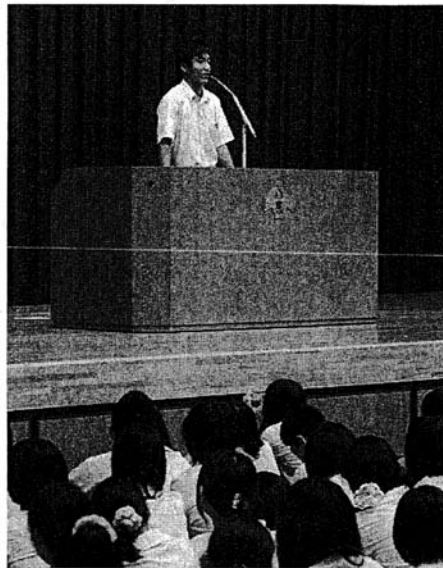
ボランティア参加の畝傍高生

片付け作業などに汗

貴重な体験、現状も報告

橿原市八木町の県立畝傍高校で26日、夏休み明けの全校集会有り、高校生ボランティア隊の一員として東日本大震災の被災地を訪れた生徒会長の吉田有岐さん(16)が現地での体験を報告した。

吉田さんは県教育委員会などが派遣したボランティア隊の第1団に参加。岩手県陸前高田市で民家跡の片付けなどに従事した。報告会では、鉄筋コンクリートの建物が津波に破壊されたまま残る状況やボランティアセンターのスタッフから「昨日も遺体が見つ



全校集会で被災地の様子を報告する吉田さん(26日、橿原市八木町の畝傍高校)

また、作業中にくきを寄付するなか、ボラを踏み抜くボランティアセンターへのアもいることから「鉄支援助も考えていきた製ソールの入った長靴」と話した。

歩んでいた」と報告した。高校生ボランティア隊は県教育委員会などから気仙沼市と岩手県陸前高田市に先月派遣された。31校から79人が参加した。同校の生徒会は福島県に文具を届けてお

被災地へ 中

高校生ボランティアの4日間

男子生徒が到着した
民家跡は、荒地地にし
か見えなかった。津波
に破壊された建物は撤
去され、コンクリート
の基礎が雑草に覆われ
ていたからだ。岩手県
陸前高田市気仙町。押
し寄せた巨大津波は防
波堤を越え、気仙川を
さかのぼった。
活動場所の周囲は山
すその木々に津波の跡

津波の傷跡

生活を語る残骸 汗だく整理作業

陶製の洗面台に換気扇、洋式便器の中にはアジナカバチの巣が見えた。夏を迎え、作業中にハチに刺されるボランティアが増えている。人が住んでいた。少しでも元の姿に近づけ、喜んでもらえたらうれしい」と県立藤生昇陽高校3年の岡田宗士きん(17)。

「被災地のために何かできるのか、しないといけないのか、現地に行くことははっきりすると思う。映像だけではほやけが、皆さんと協力して復してしまつ」と話した。18日早朝、岩手県一関市で男女別に分かれるボランティアセンターと、男子のバスは陸前高田市のボランティアセンターを目指した。午前8時すぎから続々と集まるボランティアたち。大型バスで到着する団体も多い。参加者を集



タカノの車窓には、爆風にかざされたような漁港の風景が延々と続いた。

ボランティアセンターで割り当てられたのは魚網にからまった仕掛けの除去作業で、ナイロン製のひもをペンチで切って引き抜いていく。昼食をはさんで約4時間。うす高く積み重ねていた仕掛けは地面が見えるほどに減っていた。雨具で汗だくの生徒に依頼者の女性が冷えたフチトマトを差し出してくれた。地面が揺れたのは車を取り除いた仕掛けを運ぶ女子生徒。最後の民家は1階が津波に覆われている19日、宮城県気仙沼市

被災地へ 上

高校生ボランティアの4日間

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県陸前高田市と宮城県気仙沼市を、県内の高校生ボランティア隊が17日から4日間の日程で訪れた。津波が深い傷痕を残す被災地は高校生たち

派遣が決まったのは先月20日。学生を対象にしたボランティアバスを県が出すことになり、県教団(40人)はきょう23日徒会連絡会が応募して認められた。目的まで約14時間。私立を含む全ての高校から参加者を募り、31校

集まった有志

現地まで14時間 惨状に言葉なく

ボランティアセンターを10分もたないうちに周囲の風景は一変した。道路脇に積まれた廃車の山、3階まで津波に破られたマンション。名勝「高田松原」に残った「希望の松」がすぐ近くに眺められた。



割り当てられた作業場所に到着し、引率の県教委指導主事から説明を受ける生徒=18日、岩手県陸前高田市

雨の中、現地に立った。県立生駒高校2年の石田真貴さん(17)は「大変な気持ちで考えれば被災地が主観的なものになった。避難した人への気持ちは考えれば被災地が主観的なものになった。言葉にできない。客観的に

< 8月23日(火) 奈良新聞 >

< 8月24日(水) 奈良新聞 >

被災地へ 下

高校生ボランティアの4日間

生徒たちが被災地で経験したのは、復興に向けた力仕事だけではなかった。地元の人々との交流もまた、それぞれの心に強い印象を残した。

活動2日目の19日、宮城県気仙沼市の赤岩児童館を10人の女子生徒が訪れた。近隣の子ともたちが自由に集まり、遊んだり宿題を済ませたりする。生徒たちの自己紹介が終わると、5人ほどの子どもが早速駆け寄り、

炎が風に流れていた」と

ハンカチ落としやドッジボールが始まった。歓声を上げて走り回る子どもたち。

高台に位置する同館には、震災当日、3000人近い人々が避難した。気仙沼湾の港街がグラウンドから眺められる。

同館職員の高山恵美子さん(50)は「普段は見えない海がゴオーツという音とともに盛り上がった。港は一晩中火の海で、

交流

希望持ち前向き 心に刻む生の声

振り返った。同館にも肉親を亡くした子どもがいるという。

女子生徒は初日に住民の案内で市内を訪問。県立奈良朱雀高校2年の敷野真歩さん(17)は「道

は被災者自身が復興に向けて取り組む姿だった。案内した住民は「役所の職員も警備の人も被災者だが、町のために働いていることを覚えておいてほしい」と語りかけた

内の人々の言葉が忘れられない」と語った。復興支援に汗を流し、被災者の生の声に接した夏休み。間もなく2学期を迎える生徒たちは、始業式などで経験を伝える

路が突然切れ、向こうがなかった。『工場や家もあつたが津波が渦を巻いて持って行った』と聞かされ、言葉が見つからなかった」と話した。

生徒の心をとらえたの

奈良市立一条高校2年の森村美沙さん(17)は「みんな知人や家族を亡くしている。それでも普通に生きていかなければならない」と話した案

を通過して仲間もできた。活動



赤岩児童館で被災地の子どもと交流する生徒=19日、宮城県気仙沼市

参加して本当によかった」と力強く話した。

（増山和樹）
|| おわり ||

< 8月25日(木) 奈良新聞 >